

[書評] 菅野盾樹（著）『いのちの遠近法:  
意味と非意味の哲学』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード: 作成者: 柴田, 正良 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/36190">http://hdl.handle.net/2297/36190</a>

# オリジナルな 哲学的思索の可能性

科学とは何でありえないか

柴田正良

偶然手にした本が哲学の本だと分かったとき、人は何と反応するだろうか。軽い失望とともに敬して遠ざかるようにそっとそれを書棚に戻すだろうか。それともあからさまな苛立ちを隠そうともせず、何か侮蔑の言葉でも吐くだろうか。人々はいまこの国の哲学の書物に何を期待できるのか。そしてこの国の哲学の徒は人々に何を語りうるのか。これらの答が何であれ、この書物が身をもって示しているのは現代におけるオリジナルな哲学的思索の紛れもなき一つの可能性である。ここでは様々な哲学思想の潮流が紹介された「対話」させられたりしているのではない。著者自身のアイディアが彼の責任において力強く描かれているのだ。本書の主眼の地と図を反転させればどう見えるか。それは、科学的認識との距離

を正確に見積ること、科学と何でありえないかを具体的な示すこと、そしてついには科学に新しい研究テーマを授けてききやるといって、もいだらうか。科学、それも近代以降を特徴づける精密な科学がいまや「知」のすべての領域を覆っているかのように見えるが、しかしわれわれはそれをへ生きていくのではない。著者の言のように、科学的認識が「よくよく企図された無関心をもって」「意味の妄言に無効の指標を付す難事業」であるなら、われわれがその意思を生きる地平はやはり意味によって縦横に縁どられたこの

科学に対してはわれわれの目の生の営みが、いやその営みの中で生きられた認識についての哲学的解明が一個の芸術作品として描き上げられねばならないはずである。われわれの(いのち)の営みがそれ固有の意味の場の中でそれ固有の論理と形態を備えているという事情は、それこそ一杯の泡立つビールをわれわれがそれとして享受するような場面からして明白である。しかし誰にも分かるこの明白さを、また誰もくっきりと言葉に定着させたことはない。著者がすでに数冊の書物をかけて追跡してきたこの主題は、本書の構成では二つの大きな流れの中で捉えられている。一つは「本質論」(一)であり、もう一つは「因果性分析」(二章)である。すでに現代科学が克服したはずの概念が二つながら「こ

に登場する所以はすでに明らかだろう。色や匂いや味わいからビールをわれわれがほぼほぼと嘗に嘗にそれとして分類すると、われわれが経験しているのは「種」に属するといふ限りで何がしかの本質を見込まれた存在であり、またその振る舞いがほぼほぼと予測されるのもその「種」に見込まれた他の事物との因果的關係性のおかげに他ならない。読者はこの点で二つの誤解を厳に慎まなければならない。一つは、「種」に関するこうした最近な例がたかたか知覚についての主観的な印象に押しすぎないとい見解を批判にすぎないとい見解をこ

とがでる。そして著者自身は、今後の大きな転回を暗示しているのだろうか。それはともかく、来るべき「示しの意味論」や「感覚の科学」といった著者のいくつかの約束への期待もさきながら、最後に読者の希望を二つだけ率直に述べたい。それは、すでに危険なまでになっているレトリックの華麗さによって著者が今後われわれ読者を驚き去りにすることのないように、という注文でもある。

(哲学)